

虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について

山下 久美*・首藤 敏元**

虫の飼育は、幼児に「命への理解や思い」「思いやり」を育む効果を持っていることが前研究(山下・首藤, 2005)で示された。社会性の発達援助は幼稚園・保育園において今日的な重要課題であるため、本研究は、虫の飼育が社会性の発達を促す効果について再度検討を行った。その結果、子どもと虫の関わりについて明確なねらいを持って保育している53人の保育者たちの観察事例によっても、それらを獲得していく過程が確認された。さらに「仲間関係を育てる」「子どもの表情が活き活きしてくる」「責任感がつく」「自尊感情が高まる」についても、飼育経験効果が示唆される結果であった。特に「仲間関係を育てる」については顕著であり、幼児期の社会性の発達を促す効果は大きいと思われる。

キーワード：幼児教育、虫、飼育、社会性の発達、生命

I 問題と目的

現代日本の抱える問題として、若者の思いやりのなさ(中里・松井, 1997)や、子ども同士のいじめの問題があり、これらがクローズアップされるようになってから久しい。また最近では命を軽視する風潮を、危惧する声も高まってきた。これらに対して様々な角度から打開策が試みられ、小・中学校においては「命の大切さを知らせる」また「思いやりを育む」ための授業研究なども盛んに行われてきた。

これらは必要不可欠なことではあるが、もっと低年齢から思いやりの気持ちを持つこと、つまり他者への視点取得は可能であることが最近の幾つかの研究からあきらかになってきている(首藤, 2001)。つまり幼児期は、このような社会性の育ちへの第一歩を築く重要な時期であり、この年齢における社会性の育ちについての研究

が、今後、さらに求められていくと思われる。

そこで本論では、その具体的な援助方法として、虫の飼育について検討を行う。幼稚園や保育園における虫の飼育は、既に前研究によって、子どもたちの生物概念形成の援助となるだけでなく、「命への思い」や「他者への思いやり」を育くむものである(山下・首藤, 2005)(山下, 2006)ことが示された。これらは、幼児への直接のインタビュー調査によって得た結果ではあるが、子ども達の園での成長の姿を把握する調査では、なかったため、幼児がどのように命について学んでいくのか、あるいは思いやりを獲得していくのか、その過程を明らかにすることはできなかった。しかし、幼稚園や保育園の中で、幼児と虫の関わりから、このような社会性の発達を実際に援助するときには、その過程や子どもの姿を知っておくことが望ましいと思われる。そのため本研究では、以下の二つのことを目的に調査を進める。

まず、前研究の中で示された飼育経験効果が実際の保育場面の中で観察されているかを確認

* 東洋英和女学院大学

** 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

すると同時に、子ども達がどのように命への理解や思いを深め、思いやりを育んでいるのか、その成長の姿を把握する。

第二に、今までの研究では明らかになっていない、その他の社会的な発達への影響を知ることが目的とする。すなわち保育現場における虫との関わりが、幼児期の情緒的な成長にどのような影響を与えているのか、観察されている姿から、その飼育経験効果を検討することとする。

II 方法

1 調査対象

虫の飼育を保育計画の中に明確に位置づけ、目標を持った活動として行っている個々の保育者、あるいは園全体で、このような方針の下、保育を行っているという保育者を対象に調査を行う。なお、いずれも保育経験年数が3年以上の保育者を対象とする。

女性は男性より虫に対する苦手意識が強く、幼稚園は若い女性が多い職場であるため(山下・首藤、2004)、このような条件を満たす園、または個人は、一般的ではないが、2つの保育園と9つの幼稚園から協力を得て、計11園に在職する53人の該当者に対して調査を行った。

それぞれの園の地域、園数と該当保育者数を以下に示す。

国立市(保育園-2園、20人)、国立市(幼稚園-1園、11人)、府中市(幼稚園-1園、7人)、杉並区(幼稚園-2園、6人)、千代田区(幼稚園-1園、3人)、新宿区(幼稚園-1園、2人)、豊島区(幼稚園-1園、2人)、三鷹市(幼稚園-1園、1人)、練馬区(幼稚園-1園、1人)

2 手続きと調査時期

上記のように条件を絞り、該当園及び該当保育者を探した。各園、または個人に電話連絡の上、手渡し及び郵送によってアンケートを送り、郵送によって回収した。回収率は100%であった。

調査は、2004年5月～9月に行った。

3 調査内容

個々の保育者が、観察した事例によって、虫の飼育が幼児に社会性や情緒の発達に良い影響を与えているかどうかの調査を行う。具体的には以下のようなアンケートによって、事例の収集を行った。

○幼稚園・保育所などでムシを飼育することによって社会的・情緒的な発達に影響があると思われますか。もし以下のような事柄について、ムシの飼育によって幼児に良い影響があると感じられたことが、あれば、それぞれの項目について、実際にあった事例を(幼児の年齢、飼育したムシ、どのようなことがあったかを)なるべく具体的に、お書き下さい。

- ・命への理解、思いを育む(命の大切さについて知る)
- ・仲間関係を育む
- ・思いやり・やさしさを育む
- ・責任感を持つ
- ・自尊感情を高める
- ・子どもの生活や表情が活き活きとする
- ・人の話が聞けるようになり、落ち着きがでてくる
- ・その他

上記の項目については、前回までのアンケート調査結果(山下・首藤、2004)から得た、園で虫を飼育するねらいの項目に、虫の飼育を日常的に行っている園の保育者が、社会性の発達に良い影響を感じると回答したものを付け加えて設定した。この園の保育者数は4名、全員クラス担任をしており、調査はインタビューによって行った。付け加えた項目は、4名全員が、飼育経験効果を感じると回答したものに限定した。

Ⅲ 結果と考察

今回の調査では「虫の事例」を依頼したが、カエル（オタマジャクシ）やザリガニなどの事例も含まれていた。これらの動物を虫と呼ぶかどうかは、定かではないが、日本人の虫の概念はもともと非常に曖昧で、蛇という漢字にも虫偏がついており、昆虫類は勿論のこと、カタツムリのような貝類を含んだり、ダンゴムシのような甲殻類も含まれているため、本論では、これらも虫として扱う。

回答として、先に示した7項目に対して全体で154の事例が挙げられた。これらは、調査者がカテゴリー化の判断をしたのではなく、回答者自身の挙げた項目に沿って行った。各事例を詳細に見ていくと、他の項目にも関係しており、必ずしもこの項目だけに該当しないと思われるものもあったが、回答者の分類を尊重した。

また今回の回答の中には、調査者の求めた内容のとおりではないものも存在した。調査依頼の内容はⅡの3に示したように、子どもの具体的な事例であったが、記述された内容の中には具体性が全くないものも含まれていた。これらは、日々の保育の中から得た保育者一人一人の実感であり、経験智ではあるが、客観的に子どもの姿をとらえるための資料とはなりにくいため、本論では除外して考察を進める。

結果として「仲間関係を育む」「自尊心を高める」の項目には除外されたものはなかったが、「命への理解や思い」26例中2例、「思いやりが育つ」28例中6例、「子どもの生活が生き生きしてくる」25例中3例、「責任感を持つ」17例中3例が、具体性がなく、感想のみを記したものであった。ただし、具体的な子どもの言動について語られていないものについても、保育者の働きかけが読み取れるもの、また虫と関わりが、何故子どもの社会的発達に影響を与えているのか、示唆を与えるようなものについては、考察の参考資料とした。

今回は、事例の内容を検討することが目的で

表1 社会的発達の効果項目に対してあげられた事例数と事例を挙げた保育者の割合

実数	割合	内容の分類
34	64%	仲間関係を育む
24	45%	思いやり・やさしさを育む
22	42%	命への理解や思い・命の大切さ重みについて知る
22	42%	子どもの生活や表情が生き生きしてくる
14	26%	責任感を持つ
14	26%	自尊心を高める（自信がつく）
9	17%	人の話が聞けるようになり、落ち着きがでてくる
1	2%	その他一家族で共感できる喜びを育てる など

あるが、事例数が多く目撃されているということは、それだけその経験効果が観察されていることでもありと考えると、各項目の事例数を表1に示す。この表から分るように、53人中34人以上の保育者が「仲間関係を育む」についての事例を挙げており、前回の調査の中で保育者が最も学んで欲しいと感じていた「命への思い」と、その次にあげられていた「思いやり」よりも、事例数が多いという結果であった。

これは理由として、仲間関係が育つ様子は、命への思いが育つというような内面的な育ちよりも、表面に現れ易く、書き止め易いということが考えられるだろう。しかしこの仲間関係が育つ効果については、考察を進める中で再度検討を加えたいと考える。

以下、本論の目的1、2に沿って、項目別にあげられた事例を検討する。この考察の中では、代表的な事例を2～3例ずつ挙げて、検討を加えていくが、その他の事例も全て、本論の最後に資料として添付する。

1 「命への理解、思いを育む」と「思いやりを育む」に関する子ども達の観察される姿

この2つの項目については、既に子どもへの直接的な調査により、飼育経験効果が認められる結果を得ているが、保育の現場における子ども

もの成長の姿を確認し、どのように育まれているかについて把握する。

(1)「命への理解、思いを育む」子ども達の姿と
保育者の働きかけ

事例1 5歳児。毎日世話をして観察していたアゲハの幼虫がサナギになったが、他の虫に幼虫の時に卵をうみつけれられて、サナギの中から違う幼虫がでてきて、アゲハにならなかった。「どうしてなのかな?」「かわいそう…」という子どもたちに、教師もはじめは良く分からず、虫に詳しい他の教師に話を聞いた。幼児と共にその話を聞いて…「そんなことがあるのか?!」と驚く。アゲハになる難しさを感じる事で、子どもたちも命のはかなさ、重さ、生きることの大変さを感じていた。

事例2 5歳児。ダンゴムシを飼育していて、ケースから出して世話をしたり触ったりしていた。卵から赤ちゃんダンゴムシが孵った時には皆で喜んで盛んに見ていた。そのうちに、暑さで死んでしまうダンゴムシがいた。女児Aは、毎日親しんで触っていたが、いつものようにダンゴムシを持ち上げたときに、死んでいることに気づき、「死んでる!」と、驚いた様子で、ダンゴムシを取り落としした。そして手を引込め、恐そうに死んでいるダンゴムシを見つめ、そのダンゴムシには触れなくなった。そのことを通して、その子なりに死を受け止めたことが分かった。また今まで親しんでいた時には、確かに命を感じていたのだと知った。こうした経験を通して命と死を感じる経験をしていくのだと思う。

上記の例からも分るが、資料も含め、この項目で挙げられた事例全体を見通すと、子どもたちは、むしろ虫の死を通して命を感じていくケースが多いようである。

事例1は、自然界では、日常的に起こっていることであるが、飼育者にとっては少々ショッキングな寄生虫によって死んでしまったアゲハの例である。また2は、命を大切に感じるだけでなく、子どもの死への恐れや、忌む気持ちが

表れている事例である。その死を目の前にした子どもの様子から、虫を命あるものだと感じていたことに、保育者自身も気づかされている。

このように自然のいとなみの中で起こる死によって、幼児は命について学んでいくが、そのようなケースばかりでなく、その他の資料中の事例からは、幼児であるがゆえに、力加減を誤って死なせてしまったり(4、5)、あるいは興味から意図的に乱暴に扱い、殺してしまったり(14、16)、ということを繰り返し経験していることが分る。そしてこのような経験を経て、命に気づいていくことが観察されている。

これが哺乳類や鳥類などであれば、その死の様は人の心に強い衝撃を与える可能性が高く、その意味でも動物を乱暴に扱う幼児に対して、保育者は子どもたちにその命を預けきることはできないだろう(藤崎、2006)。しかし虫は、藤崎の指摘にもあるように子どもたちにとっては自主的な関わりを許される存在であり、それゆえに虫の死や命について、幼児一人一人が自分自身の行動と併せて考えざるを得ない状況を作り出すと言える。ある程度の年齢に達してから、虫に対しての自分の残酷な行動に自ら気が付いて、そのようなことをしなくなったと言う人は少なくない。

ただこの時に、保育者が子どもの手に虫の命を委ねているとは言っても、ただ漫然とそれを見ているわけではない。見守る保育者が持っている役割もまた非常に重要であると思われる。保育者たちは、幼児の虫に対する関わりが不本意であっても、強く制止することはせず、子ども達自身が考えられる余地を残しながらも、自分の思いを伝えることをしている。すなわち小さな命ではあっても、大切に扱って欲しいという思いを言葉や態度で示しているのである(事例9~24)。それは、虫と関わる、子ども達に対して繰り返し送られるメッセージである。その意味において周囲の大人が持っている命に対する思いは、幼児にとって、非常に重要であると思われる。

以上、幼稚園や保育所の中で虫と関わり、命についてどのように学んでいるのか、24の事例からその様子が明らかとなった。

(2)「思いやりを育む」子どもの姿と保育者の働きかけ

事例1 4歳児。寒い冬のある日、冬眠中の虫探しに行った。樹の根元を掘り白い太った幼虫を発見した時、いつもの「持って帰ろう」の声は誰からも発せられることはなく、仲間の手から手へそっと移されながら回して観た後、元の穴に埋めていた。

事例2 5歳児。虫などを飼育していれば、水分やエサなどは飼っている人間が気をつけてあげなければいけないことに気付く。「虫は自分の気持ちをお話できないから」という意見が、子ども同士の話しあいの中から出てきた。

事例3 カタツムリを飼育していたときに、(飼育ケースの掃除が不十分であると思われたような時には)「〇〇ちゃんは、うんちが沢山あるお部屋に入れられたらどう?」と、カタツムリの身になって考えられるように声掛けを行っていた。やがて虫とは関係ない場面でも、「〇〇くん、自分がそうされたらどう?」という言葉が子ども同士の間で聞かれるようになり、自然と相手の気持ちを考えられるようになった。

これら思いやりの事例から見えてくることは、虫が、自己中心的世界観を持っている幼児に、相手の立場に立って物事を見るきっかけを与える存在になっている、ということである。多くの大人にとっては、「虫けら」という言葉で表現されるような存在ではあるが、幼児にとっては、命ある興味深い対象であり、飼育するときには、飼おうとする虫が、どのような餌や環境を必要としているのかを真剣に学ぼうとする。

事例1を見ると、子どもたちが、この虫を発見したのは偶然ではなく、それを目的に園外に出かけていき、穴を掘って、虫を取り出したことが伺える。見つけた虫は、傷つけまいと、おそらく細心の注意を払いながら手から手へと移して観合っただけであろう。幼児達がこの幼虫に

興味を持っていたことは、間違いないと思われる。しかし、「いつもの『持って帰ろう』の声は誰からも発せられることはなく」と言う保育者の記述から、虫を元の棲み処に戻したのは、子ども達の自主的な行動であったこと、そしてこの子ども達の反応を保育者がやや意外なこととして受け止めていたことが分かる。年中クラスの後半時期、おそらく保育者は、今までになかった様子を示す子ども達の育ちを喜び、「思いやりの」事例としてここに記述したのであろう。

事例2からは、「虫は自分の気持ちをお話できないから」という言葉がでたということで、子どもたちが、どのようにしたら虫に快適な環境を与えて飼育し続けることができるのか、自分達なりに考えようとしている様子が見える。このように成長していく過程の中では、事例3からも分るように、保育者の働きかけが、日々あったと考えた方が自然であろう。

資料中の他の事例も同様であるが、虫に対する子ども達の自発的な気付きと共に、その子ども達の背後に居て、思いやりの気持ちを育もうと支えている保育者の姿が見えてくる。飼育という機会を通して、周りの大人(保育者)が、子どもには見えていない虫(他者)の視点を知らせるための言葉を頻繁にかけることの意味は、小さくないだろう。結果として、子ども達は、他者の立場にたつて物事を見るよう促され、思いやりが育まれていくと推察される。虫は保育者のこうした働きかけの、良いきっかけとなっていることが、見て取れる。

2 その他の社会的な発達への影響

前項目において、幼稚園や保育所の中で虫と関わる子どもたちの「命への理解や思い」と「思いやり」を育てていく様子が明らかとなったが、その他の社会的な発達への影響についてはどうであろうか。観察された事例から、各項目の効果について、以下に検討を行う。

(1) 仲間関係を育むことへの影響

事例1 虫に興味を持っており、だんご虫がた

くさん入っている飼育ケースを覗き込んで歩く姿を見たり、指で突っついて丸まる姿を見たりと楽しむ1歳児。すると3歳以上の子達が園庭で見つけただんご虫を手の平にのせてくれ「だんご虫っていうの。握ったらダメだよ。そーっとね」と教えてくれ世話をやいてくれた。1歳児も嬉しくてお兄さん、お姉さんの後について一緒に土の中を探し、見つけては「いた！いた！」と喜びを共有していた。

事例2 飼育していたアゲハ蝶がかえり、クラスの子どもたちがそれを取り囲んで見ていた。しばらく見ていたが、飛ばない様子。「どうしたのかな？」「どうしたのだろう、お腹空いてるのかな」と、今まであまり接点のない子ども同士が共通の興味を通して言葉を交わすようになっていった。

事例3 5歳児。8名だけの少人数クラスなのだが、逆にかかわりを持つ子の偏りがあった。虫（トンボのヤゴ）を媒体とし、同じ興味を持ってた子ども達が、何のトンボのヤゴかを図鑑と一緒に見たり、触ったりしていた。こうしたことが、今までになかった関わりを持つきっかけとなった。

以上事例1～3のように「仲間関係を育む」効果としては、虫を媒体に人間関係が育まれるというような事例が多かった。対象物が何であれ、互いに興味や関心を共有することができれば、交流が生まれて人間関係が育つことは、想像に難くない。その点でも虫は、自ずと幼児の興味を強く引き付けるものであり、今まで関係が無かった子ども同士に、話し合うきっかけと、共感の機会を与えている。

事例1では、保育園での1歳児と3歳児交流が観察され、幼稚園では最年少の3歳児が、1歳児に対して年長児の気遣いを示している。たとえ虫のような小さな存在であっても命あるものであることから、その命を囲んで幼児の中に会話が生まれるときに、無生物を媒体とした交流にはない、暖かな情緒的な関わりが生まれてくることが多いようである。それは資料中の事

例20にもあるように、「子どもたちが一緒に気にかける対象がいると、クラスに一体感が生まれてくる。」というような質のものであるといえるだろう。

さらに虫は、普段友達とあまり関わらない、あるいは関わり下手な幼児が、一人遊びの対象として選ぶことがあり、この場合にも事例3や23で観察されるように、子どもたちが共通の話題にしやすいものであることから、人間関係を広げる一助となっている様子が伺える。

この仲間関係を育む効果は、資料中の事例内容を検討した結果においても、保育者たちが感じているように、充分効果のあるものだと言えるのではないだろうか。また、この項目の事例数の多さは、単に事例内容が目撃されやすい種類のものであるというだけでなく、実際に仲間関係を育む効果が大きいこととも関連していると考えられるだろう。

(2) 生活や表情が生き生きすることへの影響

事例1 5歳児。カブトムシが成虫になって出てきた時、とても喜ぶと共に驚きの表情が見られた。またヤゴが羽化する様子を見ることができたときも、毎日、他のヤゴの変化を楽しみに見たり、観察ケースや図鑑を見比べるなど好奇心旺盛な様子が（自らでてくるのが）見られた。

事例2 5歳児。飼育しているカブトムシの幼虫を2週間ぶりにあけてみて、大きく成長していた時やそれを手の平にのせられるようになった時、生き活きとした表情になってくる。

事例3 虫かごを持ち歩き、いろいろなクラスの友だち&先生に虫を見せる。登園を嫌がっている子も、「虫さんにご飯をあげるの！」と楽しみにするようになり、進んで登園するようになった。

幼児が虫と関わることによって生き活きしてくる理由は、主に三つに分けられていた。

一つ目は、完全変態する昆虫の劇的な羽化を目撃して感動したことから生き活きとしたというような例で、事例1が代表するものである。資料中の事例4～6においても、命の不思議さ

や自然の仕組みの面白さに触れて、おおいに喜び、目を輝かせてルーペで虫を見入る子どもの姿が観察されている。幼児にとって初めて見る小さな生き物達の世界は、驚きにあふれており、様々な感動を呼び起こすものだろう。

二つ目は、虫との関わりから自信を持つことができ、人間関係が広がって、結果として日々の生活が意欲的になったというケースである。詳しくは、この後に「自尊感情を高めること」の項目の中で考察するが、事例2や3に代表され、7～10にも見られるように、虫との関わりをきっかけに、子どもの様子がそれ以前とは変化していることが観察されている。これらは、先に挙げた「仲間関係を育むこと」と、後の「自尊感情を高めること」の中にもできるような事例であるが、保育者は、結果として幼児の生活が生き活きとしてきたことに注目して、この項目の事例としてあげたのだと思われる。

三つ目は、虫が子ども達の愛情の対象となり、子どもの生活が生き活きとしてくるというケースである。事例3の「『虫さんにご飯をあげるの!』と、楽しみにするようになり……」とあるように、人は幼児であっても、愛されるだけでなく、自らも愛情を注ぐ対象を求めるものである。ぬいぐるみなどを愛着の対象とする幼児であるが、無生物とは異なり、虫たちは、小さくても着実にその成長ぶりを見せてくれる。それは幼児にとって、興味と愛情を持ち易い存在だと言えるだろう。事例11の、毎朝オタマジャクシの水槽を覗いて「今日もお兄さんになってるかな?」と言う様子や、また12～14の育った蝶を逃がすときの嬉しそうな様子からも、小さな生き物へ愛情を感じていること、そしてそれが子どもたちを生き活きとさせていることが窺える。

以上の内容から、虫と関わる生活には、子どもたちが生き活きとさせる効果があることが、見て取れる。

(3) 責任感を育てることへの影響

事例1 4歳児。アゲハの幼虫を拾ってきた幼児は、毎日、登園時にアゲハがいたと思われる、夏みかんの葉を餌として、一枚ずつ持ってきた。幼虫は毎日大きくなっている。この幼児がアゲハの幼虫のために登園時に葉をとる様子などを母親も話してくれた。

事例2 5歳児。カマキリを捕まえて園に持ってきてくれ、今お世話をしています。カマキリはおなかが空くと、本当にペチャンコになるので、一日たりともお世話をしないわけにはいかず、とつても責任感が育った。捕まえてきた子はもちろん、その仲良しの子も一緒に生きているもの(シジミチョウ、ダンゴ虫、アリ)を与えています。

事例3 5歳児。9～10月、園庭にいるバッタを捕まえて飼っていた。土日の休みが入るとバッタに餌の葉などが入れられなかったので、バッタを飼っていた子どもたちと、相談し、金曜日の降園時には、自分たちでバッタを園庭に逃がすことにした。そして、また月曜日からバッタとりや飼育を楽しんだ。こうした繰り返しを、1ヶ月半くらい取り組んだことで、自分たちで世話をする気持ちが育っていった。

前項目で挙げたように、幼児は虫達に愛情を覚え、その世話をすることに喜びを感じる。事例1では日々大きくなる幼虫に喜びを感じながら、自主的に餌を毎日持ってくる幼児の姿がある。事例2では、時には、世話を忘れそうになる幼児に対して、カマキリの、「ぺっちゃんこになる」お腹が、給餌を思い出させてくれているようである。事例3では、子どもたちは保育者のリードのもと、休日の対処について考え、解決策を見出して、1ヶ月半飼育を続けることができたということである。

虫に興味を持つ、愛情を感じるということは、幼児にとって世話をするための最も重要な動機ではあるが、6～8の事例から分ることは、3歳児クラス、4歳児クラス時期に年齢に即した保育者の働きかけがあつて、5歳児の姿がある

ということである。「継続的な世話ができる」「責任感を持つ」までになるには、年齢とともに、こうした意識を育てるための、時には失敗を含めた繰り返される体験が必要なのではないだろうか。

動物を飼育することによって、責任感が育つという事例は、一般によく耳にすることであり、多くの人にとって異存のないところだと思われるが、以上のように、虫であってもその役割を果たす可能性は高いようである。また「命への思い・命の大切さ」の項目の中でも述べたが、虫はその飼育の責任を子ども達自身が任されることも多いため、幼児にとって、より責任感を育む機会を生み出しているともいえるだろう。

(4) 自尊感情を高めることへの影響

事例1 話しをすることの少なかった男児、庭で母親と虫をみつけ、テントウムシだと教えてもらい、「これはテントウムシだよ!」と、友だちに見せた。保育者も「すごい!」と褒め、「何テントウムシか、名前を調べたらおもしろいね」と話し合い、母共に名前を調べていった。今ではクラスの中で「虫博士!」と呼ばれて、どんどん自信がついている。

事例2 いつもは恥かしがり屋、照屋さんの男の子、友だちとも自分から進んで関わる事もなく、4歳児になっても一人遊びのA君でした。彼の以外な一面、それは虫のことになると誰よりも目を輝かし、担任にとびついてくることです。そして虫をきっかけに、友だちと一緒に捕まえに行ったり、エサを見つけに行ったり、彼にとって虫は、自分を表現するものでした。

動物の飼育によって幼児の自尊感情が高められたとする報告は、先行研究の中にも見られるものである(Endenburg, Baarda, 1997)が、それらは殆どが哺乳類や鳥類の飼育事例である。しかし虫においても、同様な飼育経験効果があるのではないかと、上記の事例や資料中のものから推測されるだろう。

ただし自尊感情を持つ経緯は、哺乳類や鳥類の場合と虫の飼育による場合とでは多少異なる。

哺乳類などでは、飼育している動物が飼育者になつき、人と動物との間に相互的な情の交流が生まれ、このことによる自尊感情への効果が大きいとされている(中川、2000)。虫では、そのようなことは通常あり得ないが、「子どもの生活や表情が活き活きしてくる影響について」の項目の事例にも挙げられているように、虫を「持てるようになった」「捕まえられるようになった」あるいは「虫のことに詳しくなった」ことが、幼児に自信を与えているのである。さらに「仲間関係を育てる」の項目部分でも検討したように、虫への関心を友達と共有することで、人間関係が広がっていき、さらに詳しくなった知識を披露して友達に一目置かれ、結果的に自尊感情が高まっていることが読み取れる。

それは、事例1、2にあるように、友達とのコミュニケーションがうまく取れない幼児にも、しばしば見られる。このことは、実際の保育場面において非常に重要であろうし、コミュニケーション下手な幼児に対して、特に注目すべき効果だと考える。

「責任感を持つ」「自尊感情を高める」についての事例数は14例ずつであり、53人の4分の1強が事例をあげたに過ぎないが、内容で見ると、どちらについても、その効果が十分に示唆される結果であったと考える。

IV まとめと今後の課題

以上、子どもが虫と関わり、どのようにその社会性の育ちを獲得しているか、その様相を掴むことができた。

「命への理解と思い」、「思いやり」を育む効果については、前研究の結果と、今回の事例内容の検討結果から、その飼育経験効果は、十分に認められるものであった。「仲間関係を育てる」についても、事例内容と事例数から、虫と関わることによる効果が認められたと言っても良いであろう。

ここで今回の事例内容を再度検討してみると、

保育者自身の言葉がけや、指導の内容を記述しているものが多くあった。それらを項目ごとに、幾つあったかカウントしてみると、結果は表3のようであった。

「命の理解や思いの育ち」の項目には、保育者自身の指導が、最も多く書き込まれていることが分かる。この事例中の77%が、自身の言動を書き込んでいるものであった。命の理解や思いについて、子どもたちの成長を語るときには、自らの保育実践を、語らざるを得ないということであろうか。命について理解させたい、知らせたいという保育者の強い思いであるとも受け取れる。

2番目に保育者自身の言動の記述が書き込まれていたのは、「思いやりを育む」の項目であった。「命について」と同じように、飼育活動を通して特に保育者が子ども達に伝えたいと考えている事柄であり(山下、首藤、2004)、それだけに、保育者の働きかけが多くなることも考えられる。

反対に、「仲間関係を育む」の項目には保育者の言動については、殆ど記述がなかった。

つまりこの表3から言えることは、二つあるのではないかとと思われる。一つ目は、仲間関係の広がりや、虫との関わりを通して子ども達の中に自然発生的に生じるのではないかとということ、そして二つ目は、命の大切さや、人への思いやりについては、虫をきっかけとしながら、保育者が子ども達の中に育てていこうとするも

のなのではないか、ということである。

どちらも、社会性の発達にとって、重要な効果であると思われるが、幼児にとって、虫との関わりが、自然発生的に仲間関係を育むものであり、さらに事例中に見られたように、人間関係が苦手な幼児にも、効果があるとすれば、このことは、大きな意味を持つであろう。

どのような園であろうと保育者が意識さえすれば、虫と関われるように環境設定することは、さほど困難なことではなく、「人間関係をうまく結べない」、「社会性に問題を抱えている」子どもが多いと言われる今日、非常に有効な援助となる可能性が高いと言えないだろうか。

また仲間関係が円滑になるということは、当然、その他の社会性の発達にも大きな影響を与えることが考えられるだろう。そこで、保育者が虫とのかかわりの中で育つとした、この6項目の関係を考えてみたい。もともと各項目は、本論の事例内容そのものが示しているように、何に該当しているか、判断することが非常に困難なほど、互いに関係し合っている。

これらを図式化すると図1のようになるのではないだろうか。友達との良好な関係は、思いやりを育むことにつながるであろうし、またその逆の関係も成り立つと思われる。そうした生活の中から、自尊感情や責任感が生まれ、これらの循環の中で、命を大切に思う思いを実感し、幼児の生活全般が生き活きとしたものとなっていくことが考えられるだろう。これは子どもの

表2 保育者の指導について記述されている事例数とその割合

保育者の指導事例数	%	内容の分類 (全体の事例数)
17	77%	命への思い・命の大切さ重みについて知る (22)
7	29%	思いやりが育つ (24)
3	21%	責任感を持つ (14)
3	14%	子どもの生活や表情が生き活きしてくる (22)
1	1%	自尊感情を高める (14)
0	0%	仲間関係を育む (34)

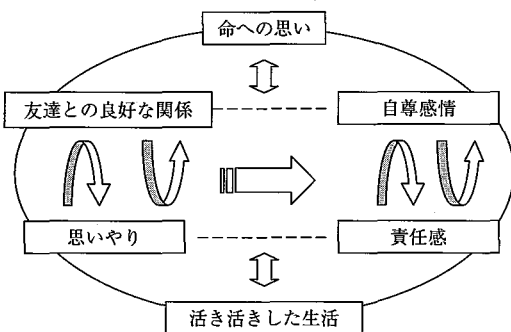


図1 六項目の関係モデル

内面の育ちの循環であり、どの部分から始まったとしても、互いに関連して発達していくものだと思う。

最後に今後の課題として、今回の研究は、保育者の観察事例を元に進めてきたが、調査対象者からは、この事例の書き込みは非常に難しく、苦勞であったとの感想が聞かれた。6項目の事例に関して、実際には経験していても、それを見合うようには、書き込めなかったとの意見も多かった。

今後の課題としては、調査者の直接的な観察によって効果を確認する必要があるだろう。特に調査者が幼児に対して直接インタビューを行っていない4つの項目「仲間関係を育む」、「日々の生活が生き活きしてくる」、「責任感を持つ」、「自尊感情を高める」に関しては、何らかの直接的な調査を行い、これらの効果について、確証を得ることが必要だと思う。

〈引用文献〉

- ・ Endenburg.E. & Baarda.B. (山崎恵子訳) 人と動物の関係学 The Waltham Book of Human-Animal Interaction メディカルサイエンス社 インターズー 1997年.
- ・ 藤崎亜由子 第6章 虫の命について学ぶ子どもたち (pp.103-121) 小動物とロボットをめ

ぐる就学時前のコミュニケーション活動の生態学的研究 平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(研究代表者:麻生 武 課題番号14510141) 全122頁.

- ・ 中里至正・松井洋 異質な日本の若者たち:世界の中高生の思いやり意識 プレーン出版 1997.
- ・ 中川美穂子 学校飼育動物のすべて 子供とゆとりある飼育を楽しむために 株式会社ファームプレス p.25.
- ・ 杉原一昭監修 発達心理学の最前線 3部1章 教育出版 2001 p.106.
- ・ 山下久美・首藤敏元 幼児への動物教材(ムシ類)の提供についての研究, 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要第3号, 2004, pp.154-155.
- ・ 山下久美 ムシ飼育のねらいとその飼育体験効果について—幼稚園・保育園におけるムシの飼育の意味— 東洋英和女学院大学 人文・社会学論集第23号 2006, pp.79-98.
- ・ 山下久美・首藤敏元 ムシの飼育体験とその保育効果について—5歳児クラスでの飼育実験から—日本保育学会第58回大会論文集 2005.

(2008年3月31日提出)

(2008年4月25日受理)

(資料)

命への思いを育み・命の大切さを理解したと思われる事例

1	5歳児。毎日世話をし観察していたアゲハの幼虫がサナギになったが、他の虫に幼虫の時に卵をうみつけれられて、サナギの中から違う幼虫がでてきて、アゲハにならなかった。「どうしてなのかな?」「かわいそう……」という子どもたちに、教師もはじめは良く分からず、虫に詳しい他の教師に話を聞いた。幼児と共にその話を聞いて……「そんなことがあるのか?」と驚く。アゲハになる難しさを感じる事で、子どもたちも命のはかなさ、重さ、生きることの大変さを感じていた。
2	5歳児。ダンゴムシを飼育していて、ケースから出して世話をしたり触ったりしていた。卵から赤ちゃんダンゴムシが孵った時には皆で喜んで盛んに見ていた。そのうちに、暑さで死んでしまうダンゴムシがいた。女児Aも、毎日親しんで触っていたが、いつものようにダンゴムシを持ち上げたときに、死んでいることに気づき、「死んでる!」と、驚いた様子で、ダンゴムシを取り落とした。そして手を引っ込め、恐そうに死んでいるダンゴムシを見つめ、そのダンゴムシには触れなくなった。そのことを通して、その子なりに死を受け止めたことが分かった。また今まで親しんでいた時には、確かに命を感じていたのだと知った。こうした経験を通して命と死を感じる経験をしていくのだと思う。
3	元気のないムシを見ると心配している。死んでしまっていた虫をみると、「お墓に埋めてあげよう」と悲しそうにお話をしてくれる。
4	3歳児。殻の中に入ってしまったカツムリをどうしても見たくて殻を割り、中から出そうとした。しかし、形の変わってしまったカツムリを見て、自分のしたことに気づいたようだった。子どもたちの気持ちが、変化したことが感じられた。
5	4歳児。おたまじゃくしとの関わりで、日常からおたまじゃくしに興味を持っていたため、他の子以上に手の上に乗せたりとよく見て触っていた。しかし、力の加減を間違えて、尾をちぎってしまい、翌日死んでしまった。尾の切れたおたまじゃくしに対し、降園後、煮干を母親と買い行き、また園に戻ってきて、丁寧に、煮干をちぎってあげていた。ちぎってしまった後、事の重要さに気づき、ほとんど口を開かず、表情も暗かった。
6	4歳児。アゲハの幼虫がミカンの木のトゲに刺さって死んでしまったことがありました。また羽化の際にサナギから落下して羽を広げられずにもがいているチョウを目の当たりにしたこともあり。そうした出来事から、交通事故に合った人のこと、障害を持った人のことに置き換えて、話し合ったことがありました。
7	自分よりも小さい虫への興味を持ち触れていく中で、指先でつぶしてしまったり……という事がよくある。そして、こういう場に出会ってこそ命というものに気付いていけるのではないかと思う。
8	2歳児。飼育している小さな生きものに餌をあげているうちに、お友達のように親しくなってくることがあります。そんな時にオタマジャクシが死んでしまい「おたまじゃくしさんとこいちゃったのかな?」「バイバイしちゃったの?」と毎日毎日聞いてきました。
9	5歳児。園庭のプランターの下から現れた大きなカエル。男の子たちが手のひらにのせ、あっちへこっちへ持ち歩く。そのうち取り合いになる。その間にいじられすぎたかぐつたりしてしまった。慌ててバケツの中に入れて見るだけにしたが死んでしまった。皆で話し合い、命があること、小さい生き物も命を持つという意味では同じだということ気付かせ、皆でお墓を作った。
10	3歳児。子どもがかわいいと思って、ついついザリガニと遊んでいると、そのザリガニを棒でつついて、背中に穴があいてしまった。そして死んでしまった。「みんなも棒でたたかれるとどうか……か」や、小さな生き物も、お友だちと同じで、大切な命がある事を伝えた。
11	4歳児。おたまじゃくしをもらい、カエルになってきたが途中で何匹か死んでしまった。そこで皆で話し合いをし、自然にいいことが良いことだと納得して子どもたちと一緒にかえしにいった。
12	4歳児。年中の子どもがセミを捕ってとって来た。そこで、「セミは長く生きられないから、出来るだけ逃がしてあげようね」と答えた。「分かった」と言いつつも、セミとりに夢中になり、楽しそうであった。
13	5歳児。カエルを飼っていましたが、やはり動く虫(生きてる虫)しか食べず、えさ探しがとても大変だが、大好きなカエルのために、毎日毎日えさをあげ、大切にお世話をしていました。しかし、少しずつやせてきてしまったので、みんなでどうしてあげるか話し合いをしました。
14	5歳児。みつけたアリの踏み潰していた。「君のせいでもう動けないし、おいしいものも食べられないよ。」と、話した。
15	3〜4歳児。食べ物をあげたり、しっかり世話をしなければ、虫だって死んでしまうんだよ、と教えました。虫さんに、嫌がる事をしては駄目なんだよ。力比べはいいけれど、いじめたらだめで、死んだら、もう二度と生き返らない、という事を教えています。
16	1歳児。てんとう虫に対して「パン!」と手でたたこうとする子どもがいた。「いたい、いたいよ」と促すが止めず、動かなくなってしまった。その様子を他の子どもたちも心配して見ていたが動き出し、ホッと、皆で逃がしてあげた。
17	3歳児。自宅の網戸にいたカブトムシを園に持ってきた子どもがいた。しばらく園で飼っていたが2週間余りで死んでしまった。一人一人に、そのカブトムシを見せ、「長くは生きられない」とか「死んでしまったら生き返らない」ことを伝え、みんなでお墓を作った。
18	ムシと関わっているとどうしても死に出会います。そして「死んじゃって、かわいそう」と、子どもたちが言っているのをよく耳にします。
19	幼虫を羽化するまで育てたアゲハだったが、羽を広げる段階で、羽が破れてしまったため、うまく飛び立つことができなかった。それを見て、「こういうこともあるんだね」と、悲しむ気持ちを表している幼児がいた。その後、蜜を吸えるように、花の上に逃がしてあげていた。

命への思いを育み・命の大切さを理解したと思われる事例（つづき）

20	園庭のプランターの脇にかくれていたひき蛙。みんなで触ったり、水に泳がせたり、そのうち元気がなくなり、それはどうしてか話す。もう離してあげようと、そっと庭のすみ離してあげたが、次の日に死んでいた。生物に関わる時にどうしたらいいか皆で話し合った。
21	3歳児。カタツムリなどと関わっていて、子どもによっては、力加減がわからなかったり、手に持っても、落としてしまったりする事もある。生き物なので、やさしく手にすることを声かけていくようにしている。
22	飼っていたザリガニが、突然、次の朝ケースの中で死んでいた。脱皮に失敗か？ どうして死んだのか？ 死んだらどこにいくの……などクラスで話し合う。体は土になり、心は天国に行くね……と土に入れて祈る。
23	生物とかかわるからには必ず命や死について直面する場面がある。事例の数はあげられないが、死を知るチャンスに、常に言葉かけをしていくようにしている。
24	小さい子はアリなど怖さ半分で、足で踏み潰すことが多いですが、アリさんから見たらみんなは怪獣に見えるよ、みんなも怪獣に踏み潰されたらどうかなー、「イヤダー！」と必ずいます。死んじゃったらお母さんにも会えなくなるし……と、自分と重ねて分かりやすく伝えると、しみり聞いています。

思いやりや、やさしさが育つ経験をしたと思われる事例

1	4歳児。寒い冬のある日、冬眠中の虫探しに行った。樹の根元を掘り白い太った幼虫を発見した時、いつもの「持って帰ろう」の声は誰からも発せられることはなく、仲間の手から手へそっと移されながら回して観た後、元の穴に埋めていた。
2	5歳児。虫などを飼育していれば、水分やエサなどは飼っている人間が気をつけてあげなければいけないことに気付く。「虫は自分の気持ちをお話できないから」という意見が、子ども同士の話しあいの中から出てきた。
3	カタツムリを飼育していたときに、(飼育ケースの掃除が不十分であると思われたような時には)「〇〇ちゃんは、うんちが沢山あるお部屋に入れられたらどう？」と、カタツムリの身になって考えられるように声掛けを行っていた。やがて虫とは関係ない場面でも、「〇〇くん、自分がそうされたらどう？」という言葉が子ども同士の間で聞かれるようになり、自然と相手の気持ちを考えられるようになった。
4	3歳児。カブトムシに優しく触れるようになってきた。ムシカゴをぶつたりすると、かわいそうだということが日々分かってきた。
5	4歳児。(ムシの)お世話を全然やってくれなかった時期、子どもたちに「虫さんは、今どんな気持ちかな？」と投げかけてみた。「おなかすいて!!」「つまらないって」etc. そんな話し合いや、その話し合いで気付いたことで、虫に対してだけでなく、友だちへのやさしさが育つと思う。ケンカしても、友だちの立場になって考えられる。
6	4歳児。おたまじゃくし→カエル→ごはんがない→どうしよう話し合い、「バイバイするのは淋しいけど、ごはんがなくて死んじゃうのは、かわいそう。お池に逃がして、ごはんいっぱい食べて大きくなったら、またきつ戻ってきてくれるよ」と話し合いました。
7	4歳児。触り方などを覚え、「乱暴に扱ったらかわいそう……」ということをやだち同士でも伝え合い、友だちに対してもやさしい気持ちで接している。
8	4歳児。登園時に道におちていたアゲハの幼虫をかわいそうだからと拾って、幼稚園で育てることにした。教師は同じ葉でないと育たないかもしれないことを拾ってきた幼児に話すと、毎日その葉を持ってくるようになった。
9	5歳児。見つけたダンゴ虫やカタツムリにエサをあげようしたり、土や葉を入れて、その虫が生きていけるように考えた飼育しようとしている姿が見られる。
10	カタツムリとの関わりから、死んでしまったカタツムリに「かわいそう」などの言葉が聞かれるようになる。
11	カタツムリを一匹みつけた。4歳の子どもが「このカタツムリさん1人じゃさみしいみたい……お友だちがほしいって」と言うのを聞いた。
12	カブトムシの幼虫が暑さのせいか土からはいあがってきてしまう。子どもたちは「死んじゃうよ」「大丈夫かな」と自分たちで気付き、土をかけていた。
13	サナギからかえるチョウを見ていた時、「しずかにしてあげよう」と声がかた。
14	セミ捕りをして籠に入れていたが、保育者の話から命が短いことを知った。そして逃がしてあげていた。
15	ダンゴ虫が1匹で寂しそうだから、「仲間を探してあげよう。」「もっと良い場所を探してあげよう」、などと言い、そのようにしていた。
16	ダンゴムシとりに夢中ですが、ペットボトル(マイ虫入れ)にいれて楽しんだ後は「元のおうちにかえしてあげようね!お母さん待ってるよ」というと、納得してくれます。
17	チョウチョや虫に触れる時など強く握らないとか、エサを与えないと元気がなくなる、つかまえて持ち遊び、いじくりまわしたらどうなるかなど、飼育したり、関わる中での体験の深さから、感じとってくれる。
18	飼育していた、ザリガニやダンゴムシが死んでしまった時は、子どもたちから「埋めてあげよう」とスコップを手にお墓を作っている。「天国でも、いっぱいあそんでね」と手と手を合わせて、お祈りしている姿に「みんながお墓をつくってくれたから、天国でいっぱい遊べるよ、ありがとう」と言葉かけをしている。

19	生き物に興味・関心を継続的に持った場合思いやりは育つと思います。また、保育者や親など近くの大人がどのように生き物を見て、扱っているかを見ることで育つてくると思います。
20	虫さんお腹すいてないかな？ ひとりでさみしくないかな？ など思いやる事ができた。
21	虫との関わりの中で、やさしく接することを学んでいる。テントウム虫を手へのせると、そーと見ていたり、やさしく触ることを子どもがしていた。
22	虫や動物にことばをかけている。「イヤなんだね」、「いたかったね」、「おなかすいたね」など。乱暴することがなくなった。

仲間関係に良い影響があると思われる事例

1	虫に興味を持っており、だんご虫がたくさん入っている飼育ケースを覗き込んで歩く姿を見たり、指で突っついて丸まる姿を見たりと楽しむ1歳児。すると3歳以上の子達が園庭で見つけただんご虫を手の平にのせてくれ「だんご虫っていうの。握ったらダメだよ。そーとね」と教えてくれ世話をやいてくれた。1歳児も嬉しくてお兄さん、お姉さんの後について一緒に土の中を探し、見つければ「いた！ いた！」と喜びを共有していた。
2	飼育していたアゲハ蝶がかえり、クラスの子どもたちがそれを取り囲んで見ていた。しばらく見ていたが、飛ばない様子。「どうしたのかな？」「どうしたのだろう、お腹空いてるのかな」と、今まであまり接点のない子ども同士が共通の興味を通して言葉を交わすようになっていった。
3	5歳児。8名だけの少人数クラスなのだが、逆にかかわりを持つ子の偏りがあった。虫（トンボのヤゴ）を媒体とし、同じ興味を持てた子ども達が、何のトンボのヤゴかを図鑑を一緒に見たり、触ったりしていた。こうしたことが、今までになかった関わりを持つきっかけとなった。
4	5歳児。男の子の家からカブトムシの幼虫をもらい皆で飼うことになった。自分たちの幼虫という意識から、毎日よく観察していた。普段しゃべらない子、仲間に加わらない子も、輪の中に入っていた。
5	1人の友達が虫（例えばシヨウリョウバッタやチョウ）を持ってくると、「何の虫？」と関心を示して集まってきます。そこから会話が生まれます。
6	3歳児。カブトムシ飼育中。カブトムシの本や図鑑などを置くことにより、友達同士で見たり話したりと楽しんでいた。
7	3歳児。団子虫：カブトムシを園庭で見つけると、友達や先生に教えてくれて、どこに、この虫がいるのかを教え合ったりして知識を深めたりしていた。
8	3歳児。幼稚園に入園して不安いっぱいの子どもたち。そんな子どもたちをひきつけてダンゴムシ探し。みんなで一緒にやるなんて初めてで、始めはすぐ止めてしまっていたが、何度も探しに行くと、「僕、何匹みつけた!!」とか見つけられたけど怖くてさわれない子は、さわられる子が捕まえてくれたり、又、さわられる子の近くにいって、じっくり見たりと、友だちとの関わりが広がっていった。
9	オタマジャクシを飼育しながら、「しっぽがあるね」「お手々ある」「カエルさんになったね」と友達と見せ合っては話がもり上がります。
10	4歳でムシに詳しい子がいて、何かあると子どもたちはその子に聞きにいき、(それによって)仲間がつながってきている。
11	4歳児。おたまじゃくし→カエル→ごはんがない→どうしようと話し合い、「パイパイするのは淋しいけど、ごはんがなくて死んじゃうのは、かわいそう。お池に逃がして、ごはんいっぱい食べて大きくなったら、またきつと戻ってきてくれるよ」と話し合う。
12	4歳児。ダンゴ虫を集め、集めたダンゴ虫を容器に入れて持ち歩く中で、友達同士の交流が生まれる。
13	4歳児。園内にいる虫、ダンゴムシ、アリ、テントウムシを皆で探す事により、一緒に遊ぶ仲間という意識が芽生える。
14	4歳児。子ども達が育てていた赤カブに青虫が生まれた。飼育ケースに入れて何になるか考え合ったり、サナギ、蝶になった時にも話し合いをしていった。
15	4歳児。登園時に見つけてきたカタツムリを園で飼育ケースに入れて飼うことにした。飼育ケースに入れ「えさ入れなきゃ」と言い、どんなえさを入れるか4歳児3名が絵本コーナーにいき、図鑑を見てキャベツ、ニンジン etc を食べることを知るとともに、糞の色もかわるところを喜び合う。結果、その日はモルモットにやるキャベツを入れたが、後日ニンジンなども入れて、糞の変化を見ることにした。教師の援助は、飼育ケースを出す、観察できる机を出す。一緒に経過観察して、変化について共感しあう。世話は幼児が行った。
16	4歳時。友達と余り関わりを持てなかったAちゃんの肩にバナナ虫（ツマグロヨコバイ）がとまった。「ねえ、みんなみんな……」と呼び集めたのは保育士。注目されることを喜び、ムシが好きになり、ムシをつかまえては、友達に見せるようになり、自信もついたようだ。
17	5歳児。アゲハの幼虫成長する様子と共に、葉を食べた後のうんちの量におもしろさを感じて共感し合う姿がある。
18	5歳児。いろいろな種類を見つけては、報告しあったり、一緒に探していた。図鑑を机にそろえたり、探しに出かけていた。
19	5歳児。カタツムリ・カマキリの名前を決めたいと5歳児の子どもたち。名前を決めてから、生き物を身近に感じたのか、当番活動にも積極的になりました。
20	5歳児。カタツムリやカブトムシの幼虫などを日常的に飼育している。子どもたちが一緒に気にかける対象があると、クラスに一体感が生まれてくることを、毎年経験している。

仲間関係に良い影響があると思われる事例（つづき）

21	5歳児。夏の朝カブトムシ・クワガタムシ捕りを家族（主に父親）で楽しむ子どもたちが何処の森たくさんいるか……など、情報を交換しながら、お喋りを弾ませる笑顔は最高でした。
22	5歳児。自由時間にダンゴムシがいる場所や、「土があった方がうれしいんだよね」など、ダンゴムシについて教え合っている。
23	「今日はエサあげたかな?」「一緒にエサあげようよ」「カエルって何食べるのかな?」36匹の生物にクラス中が夢中になりました。
24	ダンゴ虫やてんとう虫のいる所を友達同士で話し合っていた。
25	テントウムシや、カブトムシについて、虫かごを囲んで話し合っている。
26	現在10匹のカタツムリを飼育中、二世誕生を楽しみにしています。毎朝霧吹き等を順番交代で仲良く行ったり、壁を散歩中のカタツムリをみつけて喜んだり、子ども同士で自然に「カタツムリのうた」をうたう姿に感動しています。
27	虫を飼育していると、「なぜ?」「どうして?」という疑問が出てくる。そうした疑問は、1人のものとせず、子どもの言葉から全体に投げかけていき、皆で話し合っている。
28	飼育中のカエルがやせてきたので、保育者としては逃がした方がいいと思ったが、子どもたちの中から「逃がそう」という声は聞かれず、エサ探しが再び始まる（子どもにまかせてみた）。しかし、日々カエルはやせてしまってくると、「かわいそう!! お母さんに会いたいのかも……」「ごはんを好きなもの食べたいんだよ」「好きなところに行きたいんだよ」という子がでてきた。皆で真剣に話し合うきっかけになった。
29	春の入園のまだ園に慣れていない頃、ダンゴムシ捕りをする子……。その姿に今まで虫に興味を示さなかった子も近寄ります。初めに捕っていた子が、「1つあげる、こわくないよ!!」など、やさしくしてくれるうち、その子も虫好きになり、他の子へもそれが広がっていった。
30	新学期最初は、仲間との関係は浅いが、生きものを媒介として、言葉や、行動に、仲間同士が深まっていくのがとても良くわかる。何の生きものかは関係なく共通している。
31	虫への興味から虫探しをするのに友達と共に行動して虫のいる場を知らせあったり、良く見合ったりする。必要な情報（葉を入れるといい、とか）も知らせ合っている。知らない虫をみつけた時に、よく知っている子に聞きに行く姿もある。
32	当園には障害を持った子供がいます。1人の男の子は、ムシも動物も苦手でした。ムシキングのカードに興味をもち、カブトムシ、クワガタの名前を覚え、本物に触れるようになり、友達とコミュニケーションがとれるようになってきています。
33	日々の保育の中で虫探しをしている子どもたちは多いので、大きい子がしていることで、小さい子が興味を持ったり、一緒に探したり……という姿が自然と生まれている。
34	虫を友達と一緒に世話をしたり、分からない事は調べたりしています。そうした中でお互いに気持ちを合わせたりするので良い事だと思っています。

子どもの生活や表情が生き活きしてくることに関する事例

1	5歳児。カブトムシが成虫になって出てきた時、とても喜ぶと共に驚きの表情が見られた。またヤゴが羽化する様子を見ることができたときも、毎日、他のヤゴの変化を楽しみに見たり、観察ケースや図鑑を見比べるなど、好奇心旺盛な様子が（自らでしてくるのが）見られた。
2	5歳児。飼育しているカブトムシの幼虫を2週間ぶりにあけてみて、大きく成長していた時やそれを手の平のせられるようになった時、生き活きとした表情になってくる。
3	虫かごを持ち歩き、いろいろなクラスの友だち&先生に虫を見せる。登園を嫌がっている子も、虫さんにご飯をあげるのを楽しみにするようになり、進んで登園するようになった。
4	4歳児。自分たちが世話をしたアゲハの幼虫が成虫に変わった時、友達に教えあい、飼育ケースを長時間のぞきこむ姿が多かった。教師は学級全体に知らせ、成虫になった喜びを学級全体で共感するとともに、降園時に保護者にも見せて、伝えて、共感した。その後みんなで飼育ケースよりアゲハを逃がして、みんなで「バイバイ! バイバイ! また来てね」と喜びがあった。以後、アゲハを見ると、自分たちの育てたアゲハかも……と話題にしている。
5	5歳児。クラスの中で、生き物を飼育すると、(例えば)ザリガニの脱皮やアゲハチョウの幼虫がさなぎになった姿を見たりすることができる。その様子を見ている子どもたちの目は、とても輝いていて、ルーペを持ってきて、じっくり観察している子どももいる。
6	庭でカナブンを見つけ、2~3人で見ていた。突然カナブンがとんだ!! 子どもはとても驚きの表情をうかべ、飛ぶ瞬間をみられて生き活きしていた。
7	5歳児。テントウムシ大好きな子、物静かな性格だが、いろいろな知識を皆の前で発表してくれた。
8	5歳児。近くの公園にバツとりに行った時、はじめは見つけられなかったバツを見つけ、自分の手でつかまえられるようになった時。
9	母親と離れられなかった子が、ダンゴ虫を通して、園に来る事を楽しみにしてくれ、又、みんなの中心となり、虫と関わりはじめた。

10	3歳児組（2階保育室）の頃は涙で母を見送っていた子が4歳児組（1階保育室）に進級し、仲間と共に虫探しをする楽しさを覚え、「虫探しするんだから、早く保育園に行こう」と母をせきたてる活発な姿に変わった。今、この子の表情やことばが活き活きとしている。
11	毎朝「オタマジャクシ」に挨拶「今日もお兄さんになってるかな」。手足が生えたのを発見した時は、36匹のオタマジャクシにそれぞれ名前をつけていた。
12	あおむし→チョウチョになった。「せまい、虫ケースじゃかわいそう。広いお空に飛ばしてあげよう！」そして虫ケースから、出て、羽をバタバタして飛んでくれた時。
13	アゲハチョウを青虫からかえました。3匹。名前を一匹ずつつけて、「今日のみかんちゃん、ちょうになるかな」「おやぶん飛ぶ練習してるよ！」と見るたびに担任に嬉しそうに教えてくれた。
14	育ったチョウを逃がす時、みなうれしそうに追いかけて見送っていた。
15	テントウムシとの出会いにより、てんとう虫のかざりなどをつけるようになりました。すると、朝登園してくると、それを指しては「てんでんだ！」と、とびはねて、ニコニコ笑ってよるこんでくれます。また、園庭や散歩に出るときも、「てんでんを探そうね」というと喜んで出かけます。
16	外マットの裏や、植木鉢の下を見たりして、自分たちで虫を探し、見つかった時の顔は、本当にうれしそうだった。走って袋をもらいに来る時は、とても興奮していて楽しそうである。がよくある。
17	飼い始めてから、カエル語カエルごっこもしたり、生活が活き活きしてきたように思える。
18	小さな子どもたちも、カメの動きを見たり、ダンゴ虫にふれたり、おたまじゃくしなどを見るだけでも心含む。
19	虫・動物がいることで、会話がはずみ、表情も活き活きしていきます。ちょっとした成長（変化）を毎日見ることができるので、良いのだと思います。
20	虫に興味を持つと、虫探しが1つの遊びになり、他の事を楽しむときと同じように子ども自身が楽しんでいる姿を見ます。
21	虫との関わりは、飼育しなくても、植木鉢の下や木々の葉などで発見し、喜びを感じワクワク体験はその子にとって表情も明るく足取りも軽くなる。
22	毎日、今日は、どこに虫がいるか、みつけれられるかどうか、の競争をすると子どもは、とても楽しそうでした。

責任感が育つ事例

1	4歳児。アゲハの幼虫を拾ってきた幼児は、毎日、登園時にアゲハがいたと思われる、夏みかんの葉を餌として、一枚ずつ持ってきた。幼虫は毎日大きくなっている。この幼児がアゲハの幼虫のために登園時に葉をとる様子などを母親も話してくれた。
2	5歳児。カマキリを捕まえて園に持ってきてくれ、今お世話をしています。カマキリはおながが空くと、本当にペチャンコになるので、一日たりともお世話をしないわけにはいかないので、とっても責任感が育った。捕まえてきた子はもちろん、その仲良しの子も一緒に生きているもの（シジミチョウ、ダンゴ虫、アリ）を与えています。
3	5歳児。9～10月、園庭にいるバッタを捕まえて飼っていた。土日の休みが入るとバッタに餌の葉などが入れられなかったので、バッタを飼っていた子どもたちと、相談し、金曜日の降園時には、自分たちでバッタを園庭に逃がすことにした。そして、また月曜日からバッタとりや飼育を楽しんだ。こうした繰り返しを、1ヶ月半くらい取り組んだことで、自分たちで世話をする気持ちが育っていった。
4	飼育ケースにくさった野菜（エサ）があつたりしないよう、水替えも毎日しなければならぬし、飼育する虫によっては、乾燥しすぎたりしてもいけない。飼うなら、どうしていったら虫が喜ぶか、ちゃんと生きていけるか……を考える。飼う→世話をする→生きていく毎日きちんとその虫に見合ったお世話が大切だと子どもに伝えている。そうした日々の中で、ムシと関わり、責任感が育つと思う。
5	5歳児。アゲハの幼虫を家庭で飼育した子どもがいました。（4歳児クラスでの経験を活かしてです）。ミカンの葉を摘んで世話をしつづけたある日。「ボクのアゲハ、サナギになったよ」「ボクのアゲハ、チョウになったよ」と羽化まで、責任持って成功させることができました。
6	現在カタツムリ10匹飼育中、毎朝登園すると霧吹きをしたり、デザートのスイカの皮などをあげていますが、まだ3歳児ですの遊びの延長の部分もあります。
7	5歳児。4歳児の頃は、ダンゴムシをひろって、自分のかごに入れても、すぐに死なせてしまう事が多かったが、年長になり、「ダンゴムシさんにも命はあるよ。ひろってきたら最後まで見てあげようね」の言葉かけを子どもたち自身で理解し、責任感を持ち最後まで親のように飼育する姿が見られる。
8	5歳児。カブトムシが腐葉土の中にある事を年中時から知っていたので、自分たちが年長に上がってからは、その虫を育てる、という責任感や使命感を持ち、毎朝必ず霧吹きで水をかけることを忘れていなかった。
9	ザリガニ飼育をすることになって、当番活動をするようになった。
10	まだ全員にみられた訳ではないのですが、生き物当番（カタツムリ、カマキリ、青虫、クワガタなど）を通して、「係りの仕事が終わってから〇〇しよう」と、優先して考えられるようになってきました。
11	5歳児。決められた時間にカイコに桑の葉をあげるため、皆で時間をみて世話をしていた。

責任感が育つ事例（つづき）

12	自分の家で生まれたザリガニを持ってきた男児が、毎日「水が汚かったらかわいそうだよね」と言って、お世話するようになる。
13	虫かごに入れた虫に、「きれいな土を入れないと可哀相、エサを探して、ごはんをあげないと」などの言動が見られる。
14	当番をしっかりとできる様になる。エサの量や水の量も、目で分けることができるようになった。

自尊心が高まった（自信がついた）事例

1	いつもは恥かしがり屋、照屋さんの男の子、友だちとも自分から進んで関わる事もなく、4歳児になっても一人遊びのA君でした。彼の以外な一面、それは虫の事になると誰よりも目を輝かし、担任にとびついてくることです。そして虫をきっかけに、友だちと一緒に捕まえに行ったり、エサを見つけに行ったり、彼にとって虫は、自分を表現するものでした。
2	話しをすることの少なかった男児、庭で母親と虫をみつけ、テントウムシだと教えてもらい、「これはテントウムシだよ！」と、友だちに見せた。保育者も「すごい！」と褒め、「何テントウムシか、名前を調べたらおもしろいね」と話し合い、母共に名前を調べていった。今ではクラスの中で「虫博士！」と呼ばれて、どんどん自信がついている。
3	アゲハの幼虫に毎日餌をやり、育てた体験から「ボクにもできた」と喜々として保育者や友だちに報告するその表情は自信に満ちたものでした。
4	カタツムリやクワガタなど、初めて触れるようになり、(幼稚園のクラス)担任に笑顔で報告している。
5	テントウ虫との関わりで、戸外に出ては「てんてん！」とテントウ虫探しが活発な子ども達。表情も活き活きしていた。目下カブトムシを飼っているが、「おはよう」と朝声をかけては、生活が活気づいている。
6	Aは今まで虫は見ることはできても、さわるができなかった。ヤゴがトンボにかわり、羽を持ち、空に逃がしてあげられることができた。夏休みにはセミも持てるようになったと報告があった。
7	最初は虫が苦手だった。生き物なので、毎日少しずつ世話をし、接する事で克服できてきた。それが自信にもつながっていくのだと思う。
8	団子虫やカタツムリに触れられなかった子が、持てた時に、パッと表情が明るくなりました。他にむけても積極的になったようです。
9	男の子なんかは、図鑑調べ、みんなの知らないことを探そうとする。見つけると得意げに報告し、周りの子からも一目置かれる。
10	Aは虫に関しては「何でも知っているぞ！」と思い、また周りのお友だちも聞いてくることで、自信につながっているようです。
11	虫をこわがっていた子が、だんだんと触れるようになった。そういった（自信をつける）効果はあるのでしょうか。
12	虫をもてなかった子どもが、自分でできた（持てた）時、とても喜んでた。自信にもなったようだ。
13	虫博士の子ども（普段は目立たない子ども）が知っている知識をみんなの前で話したりして注目をうけていた。
14	〇〇ちゃんも触れたから、私もちょっとさわってみよう……と少しずつ経験する。そんな風に虫に挑戦する内に、自分に自信が持てるようになるようです。

Effect of Children's Relations With Insects on Their Social Development

Kumi YAMASHITA and Toshimoto SHUTO

Keywords : Young children, Insects, Social Development

A previous study (Yamashita and Shuto, 2005) demonstrated that insect breeding in kindergartens was effective in fostering children's "thoughtfulness for others" and "consciousness of importance of life". Because social development support is a contemporary problem in Japanese kindergartens, the effect of such development of the sociality was examined again. As a result, the observational examples by 53 teachers with precise objectives were able to corroborate the process of acquiring these effects. Furthermore, such comments as "fostering of friendly relationships", "the children's facial expressions became more lively", "they became more responsible", "their pride were elevated", are suggestive of the results of insect breeding experience. The comment that "friendly relationships are fostered" is especially outstanding and it is believed that the effect of promoting sociality in young children is marvelous.